

Styles of cognition toward the Depersonalization/Derealization in undergraduate students : A free-description questionnaire study

田中, 裕記
九州大学大学院人間環境学府

北山, 修
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/18424>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 10, pp.125-131, 2009-03-31. Faculty of Human-Environment
Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



大学生における離人体験のとらえ方： 自由記述式の質問紙による研究

田中 裕記 九州大学大学院人間環境学府
北山 修 九州大学大学院人間環境学研究院

Styles of cognition toward the Depersonalization/Derealization in undergraduate students: A free-description questionnaire study

Yuuki Tanaka (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)
Osamu Kitayama (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The purpose of this study is to clarify how the undergraduate students cognize the Depersonalization/Derealization (DP/DR). DP/DR is a subjective feeling of unreality of the self and the outside world. In spite of the feeling of unreality, one keeps reality testing under DP/DR. In this study, Five question items, which were selected from “The Cambridge Depersonalisation Scale-Japanese Edition (Tanabe, 2004)”, were used and administered to 22 undergraduate students. 131 items were answered and classified with K-J method. The results of the classifications are 5 big categories, 10 middle categories and 25 small categories. Although “negative cognition” holds more than 70%, “positive cognition” holds 9.2%. Shimoyama(2001) mentions “Support of Clinical psychology is to support the story where the human lives with holding illness.” Therefore, it is important to support this “positive cognition” from the point of clinical psychology.

Key Words: depersonalization, derealization, cognition, K-J method

I. 問題と目的

離人体験とは

離人 depersonalization とは、自分の知覚、感覚、行為などについての能動性の意識の変化で、それらについて生き生きとした実感のない状態である (立山, 1998)。DSM-IV-TR (American Psychiatric Association (APA), 2003) では離人症性障害の項目において、“自分の精神過程または身体から遊離して、あたかも自分が外部の傍観者であるかのように感じる持続的または反復的な体験”で、“離人体験の間、現実検討は正常に保たれている”と定義されている。このように、離人体験は自分がロボットであるかのように主体性が失われた感覚になったり、自分が夢や映画の中に生きているかのように現実感を喪失した感覚になったりしている「疎隔」の感覚を体験している一方で、そのような感覚があくまでも感覚にしか過ぎず、「自分はロボットではない」「これは夢ではない」という認識を行っている。安永 (1987) は「疎隔」を感じながらも現実検討能力が備わっているという「二重意識」を離人の特徴であると述べている。

日本における一般学生に対する諸調査では、離人体験者の割合が1割程度から7割程度と幅広く報告されている (安永, 1987)。離人体験の疫学的な調査としてはイ

ギリスとアメリカにおける報告であるが、Hunter et al (2004) が詳しい。それによると「学生や非臨床群に対する質問紙・面接を用いた調査」では1割から7割、「2.標準化された診断面接を無作為抽出した地域で行うもの」では1割から2割弱、「3.精神疾患に罹患している患者に対して行うもの」では1割から8割の調査協力者が離人体験者であった。このように、調査によってばらつきはみられるものの、どの調査においても1割程度の者は体験しているという結果が出ているということから、大部ら (2006) が述べるように、“離人感は不安、抑圧に次いで臨床場面でよく見られる症状である”ということが離人体験の現状であるといえよう。

疾病としての離人体験・日常生活における離人体験

離人体験は単一の疾病として現れることがある。これを DSM-IV-TR (APA, 2003) では解離性障害の一つとして“離人症性障害 Depersonalization Disorder”としている。また、ICD-10 (World Health Organization (WHO), 2005) では、他の神経症性障害の一つとして“離人・現実感喪失症候群 Depersonalization-derealization syndrome”という疾病単位で取り扱っている。しかしながら、離人体験はうつ病、恐怖症性障害、強迫性障害との関連で生じたり (WHO, 2005)、統合失調症、パニック障害、急

性ストレス障害、解離性障害などのほかの精神疾患の経過中に生じたりすることもある (Spitzer et al, 2000)。

一つの疾病単位として、また他の精神疾患と併存することがある離人体験であるが、その一方、持続性や頻発性がなく社会生活・日常生活に影響を与えない程度の離人体験もあるとされている。これは感覚遮断など孤立した状況や疲弊した時、あるいは断眠時に一時的に体験されることがある。また入眠時や睡眠からの覚醒時、驚愕反応など大きなショックを感じた時やストレスを感じたりした時にも体験されることがあるといわれている (立山, 1998)。

離人体験とそのとらえ方

安永 (1987) は“おおむね誘発因として心身のストレス状況を認める”と述べており、“ごく単純な身体労働、酒、マリワナ、LSDなどの催幻覚的薬物使用、ヨガ、瞑想、宗教的行、などの類催眠的状況、哲学的、人生的疑問にとらえられた状況、新規な状況に直面しての緊張、などから、もう少し深刻、複雑な葛藤の伏在を認めるものまで、さまざまな誘発条件がみられる”としている。よって、病的な離人体験は「離人神経症」といわれることがある。このことから離人体験、離人症状そのものが“身を守るための機構” (北山, 2001) としてはたらいており、よりつらい現実への直面を緩衝する役割を果たしている可能性を示唆していると考えられる。

従来の研究において、体験頻度や持続時間などの視点から、離人体験をどの程度体験しているかを検討するという研究は行われてきた。しかしながら、離人体験が神経症として身を守るための機構として役割を果たしているとする、離人体験を単によくはないもの・邪魔なものとしてとらえるだけでは不十分であると考えられる。

以上のことから、本研究では離人体験を主観的・意識的にどのようにとらえているかを「とらえ方」と操作的に定義し、「とらえ方」がどのようなものであるか質的に検討することを目的とする。

II. 方 法

調査協力者 大学生 22名 (平均年齢 21.0歳, $SD = 1.8$), うち男性 10名, 女性 12名であり, 回収率は 90.9%であった。

調査期間 2007年6月から7月に実施した。

調査内容 離人体験を分りやすく、代表的に表していると思われる項目を日本語版ケンブリッジ離人尺度 (田辺, 2004) より作作的に抽出し、臨床心理学を専攻する大学院生2名とともに離人体験を代表した項目であるかを検討した。その結果5項目を質問項目とすることとし、それらの項目に対して「ときどき体験すると、どのように

感じるか」と教示して自由記述による回答を求めた (付録を参照のこと)。その結果を、臨床心理学を専攻する大学院生1名とともにK-J法を参考にし、データの分類を行った。また倫理的な配慮として、無記名で回収し、調査実施者の連絡先を通知した。

III. 結 果

調査の結果、131項目の回答を得ることができた。それらの項目をK-J法を用いて集約・分類していった。

1. 内容の分類に関して

回答内容を分類すると、Table1に示すように「その他」($n=13$)を含めて5つの上位カテゴリーと10個の中位カテゴリー、25個の下位カテゴリーに分類することができた。上位カテゴリーにおいては、記述の多い順に見ると「否定的なとらえ方」($n=96$)、「肯定的なとらえ方」($n=12$)、「何も感じない (離人そのもの)」($n=8$)、「冷静」($n=2$)の順となっていた。

2. 上位カテゴリー別の内容

「否定的なとらえ方」

このカテゴリーに含まれるのは、離人体験に対してネガティブなとらえ方をしているもので、5つの中位カテゴリーで構成されている。この中で最も記述数が多かったものは「むなしい・悲しい」($n=35$)である。この中位カテゴリーには「空虚な感じ」、「孤独感」、「寂しい気分」という内容からなる「むなしさ」($n=20$)、「悲しくなってしまう」という内容からなる「悲しさ」($n=8$)、「半分諦めてしまいそうな感じ」、「仕方ないかと思う」という様な内容からなる「諦め」($n=5$)、そして「失望」($n=2$)という4つの下位カテゴリーが含まれる。

次いで多かったものは「違和感」($n=26$)についてである。これには「不思議な気分になる」という内容の「不思議」($n=10$)、「ぼーっとする感じ」という内容からなる「ぼんやりとしている」($n=9$)、「じれったい気持ち」、「モヤモヤした気持ち」という内容から構成される「つかみたいけどつかめない」($n=4$)、「違和感を感じる」、「自分はどこかおかしいのではないかと思う」という内容の「違和感」($n=3$)の4つの下位カテゴリーが含まれている。

次に「不安」($n=18$)である。これには「こわさ」($n=6$)、「心細い気分」、「自分だけ取り残されるのは嫌だ」という内容の「心細さ」($n=6$)、「助けて」、「誰かに話したくなる」という内容からなる「助けてほしい」($n=4$)という4つのカテゴリーが含まれている。

次いで「苦痛」($n=10$)である。このカテゴリーには「気持ち悪い」($n=3$)、「不快」($n=2$)、「自己嫌悪」($n=2$),

Table 1
K-J 法による分類の結果とその回答例

上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー	回答例	
否定的なとらえ方 (n=96)	むなししい・悲しい (n=35)	むなしさ (n=20)	むなしさ, 空虚な感じ, 孤独感, さみしい, 寂しい気分	
		悲しさ (n=8)	悲しくなる	
		諦め (n=5)	仕方ないかと思う, 半分諦めてしまいそうな感じ	
		失望 (n=2)	失望	
	違和感 (n=26)	不思議 (n=10)	不思議な気分	
		ぼんやりとしている (n=9)	ぼんやりとした気分, ぼーっとする感じ, ふわふわした感じ, ほんわか, ふらふらする感じ	
		つかみたいけどつかめない (n=4)	モヤモヤした気持ち, じれったい気持ち, あせる	
	不安 (n=18)	違和感 (n=3)	違和感 (n=3)	違和感, 自分はおかしくなったのでは, 自分はどこかおかしいのではないかと思う
			こわさ (n=6)	怖いと思う
		心細さ (n=6)	心細い気分, 自分だけ取り残されるのは嫌だ	
助けてほしい (n=4)		助けて, 誰かに話したくなる		
不安 (n=2)		不安		
苦痛 (n=10)		気持ち悪い (n=3)	気持ちが悪い	
	不快 (n=2)	不快な感じ		
	自己嫌悪 (n=2)	自己嫌悪		
	元に戻したい (n=2)	もとのように戻ってほしいと思う		
	辛い (n=1)	辛い		
驚き (n=7)	驚き (n=4)	驚く, びっくり		
	疑問 (n=3)	なんで, なにしたのかな		
肯定的なとらえ方 (n=12)	楽しさ (n=10)	楽しい (n=5)	楽しい感じ, わくわく	
		好奇心 (n=5)	好奇心を感じる, 便利	
何も感じない (離人そのもの) (n=8)	楽観的 (n=2)		いつか元に戻るさ	
	冷静 (n=2)		自分と現実世界の間に壁がある感じ, 音がぼやける, 天国?と思う, 夢だと思ってみる	
その他 (n=13)			周りを冷静に見てみようという感じ (客観的になる), 自分が切り離された結果どこにいるのかを考える	
			眠い, がんばれよ, ごめんなさい, 寂しいのと同時に肩の荷が降ろされた感じ	

Table 2

<上位カテゴリー>の項目数が全体の項目数に占める割合と中位カテゴリーが上位カテゴリーにおいて占める割合

<否定的なとらえ方 (73.3%)>	
むなししい・悲しい	36.5%
違和感	27.1%
不安	18.8%
苦痛	10.4%
驚き	7.3%
<肯定的なとらえ方 (9.2%)>	
楽しさ	83.3%
楽観的	16.7%
<何も感じない (離人そのもの) (6.1%)>	
<冷静 (1.5%)>	
<その他 (9.9%)>	

「元に戻したい」(n=2)、「辛い」(n=1)という5つのカテゴリーが含まれる。

次に「驚き」(n=7)に関してである。このカテゴリーには「驚き」(n=4)と「何で」、「何をしたのかな」という「疑問」(n=3)が含まれている。

「肯定的なとらえ方」

このカテゴリーに含まれているものは、離人体験に対してポジティブなとらえ方をしているものであり、「楽しさ」(n=10)と「楽観的」(n=2)という中位カテゴリーからなる。

「楽しさ」は「楽しい感じ」や「わくわく」といった内容の「楽しい」(n=5)と、「好奇心を感じる」、「便利」といった「好奇心」(n=5)という下位カテゴリーから構成されている。また「楽観的」は「いつか元に戻るさ」という内容から構成される。

「何も感じない (離人そのもの)」

このカテゴリーには「自分と現実との間に壁がある感じ」や「天国?と思う」という回答のように、調査者が意図していなかった離人体験の様相そのものを回答していると思われるものが含まれている。

「冷静」

このカテゴリーには「周りを冷静に見てみようという感じ」と「自分が切り離された結果どこにいるのかを考える」という冷静で客観的な回答が含まれている。

「その他」

このカテゴリーは以上のカテゴリーに当てはまらない

「眠い」、「ごめんなさい」などという回答が見られていた。

IV. 考 察

本研究の目的は、離人体験が主観的・意識的にどのようなとらえられているかを検討することであった。Table2に示すように、離人体験に対してのとらえ方は「否定的なとらえ方」が全体の7割を占めていた。このことは、離人体験はネガティブな感情を喚起するということを示唆しており、離人体験はあまりよいものではないということを示唆していると考えられる。その「否定的なとらえ方」の中でも特に「むなしさ・かなしさ」という中カテゴリーが36.5%を占めていた。離人体験者自身が離人体験に対して現実的に検討すると生じる「分かってもらえない」、「周囲から切り離されてしまった感じがする」という分離体験や見捨てられ体験は離人体験が持つ本質的な苦痛であると思われる。この本質的な苦痛を味わった結果、「むなしさ」が生じると考えられる。臨床場面においては、離人体験者がセラピストと共に離人体験について語り合い、共有することによって、セラピストが「分離されていない者・見捨てていない者」として立ち会うことになるであろう。そのことによって、「むなしさ」の程度が変化したり、とらえ方そのものが変化したりする可能性がある。このことは、臨床心理学的な関わりが離人体験に対して何らかの効果を持つという可能性を示唆している。

また、「違和感」「不安」「苦痛」「驚き」に関しては、「むなしさ・かなしさ」と同様の可能性に加えて、普段あまり体験することのない現実世界との「疎隔」感を味わうことにより生じる可能性が考えられる。これら「否定的なとらえ方」が大部分を占めるという結果は、金山(2007)が示した離人症状が快感情を低下させる可能性があるという結果と部分的に関連があると考えられる。

「否定的なとらえ方」が多くを占める一方、「肯定的なとらえ方」も1割弱みることができた。この大カテゴリーでは「楽しさ」という中カテゴリーが83.3%と大部分を占めている。これは先に述べた「違和感」などと同様に今までにあまり体験していない体験・感覚に対しての好奇心のようなものが生じた結果のとらえ方である可能性が考えられる。また、中カテゴリーの「楽観的」は今回の調査が実際に病的な離人体験を経験している者を調査対象としておらず、調査協力が一般大学生であったことから、調査協力が離人体験のネガティブな部分を考慮できなかったという可能性が考えられる。しかしながら、「臨床心理学的援助は、病理を抱えてどのような人生の物語を生きていくかを援助する」というものである(下山, 2001)。このことを考慮すると、疾病とし

ての離人体験について考える際、離人体験者の「肯定的なとらえ方」を支えていくことは、離人という症状そのものを消失させることが目的である医行為に対する臨床心理学独自の行為と考えることができるのではないだろうか。

本研究の今後の課題

本研究において、調査協力者は一般大学生であったが、実際には離人症状を呈していないと想定されている調査協力者が離人体験についての文章について検討を加えるという構図は、離人体験のまっただ中にありながらも現実検討をすることが可能であるという「二重意識」の構図とパラレルであると考えられる。しかし、離人体験がどのようにとらえられるのかをより詳細に検討するためには調査協力者がどの程度離人を体験しているかを測定するとともに、とらえ方についてもそのとらえ方をどの程度の強さでしているかを加味する必要があると考えられる。また、田中 (2008) において離人体験の程度ととらえ方と精神的健康度との関連を検討されているが、離人体験に対するとらえ方がどのような要因によって規定されているのかは定かではない。よって今後の研究においては、離人体験そのものの強度とどのようなとらえ方をするか、とらえ方がどのような要因によって左右されるかを検討していく必要があると考えられる。そして、今回は離人体験として様々な体験を1つのものとして取り扱ったが、離人体験の内容は感覚的なもの、知覚的なもの、身体的なものなどと豊かなものであるということとを考慮すると、今後の研究においてはそれぞれに対して詳細な分析を行う必要があると考えられる。

付 記

本論文は2007年度に九州大学教育学部に提出した卒業論文の一部に加筆し、修正を加えたものである。本論文作成にあたり、有益な御示唆をくださった九州大学高橋靖恵先生に心からお礼申し上げます。また、本研究に協力してくださった21名の学生の方々に感謝いたします。

引用文献

- American Psychiatric Association (APA) (2000). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (4th ed. Tr). Virginia. American Psychiatric Publishing. 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸 (訳) (2003). DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き 新訂版 医学書院.
- Hunter ECM (2004). The epidemiology of depersonalisation and derealisation. A systematic review. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 39, 9-18.
- 金山範明・大隅尚広・大平英樹 (2007). 現実世界からの逃走 離人症状の分類と回避傾向の関連について. *日本パーソナリティ心理学会*, 15(3), 362-365.
- 北山修 (2001). 精神分析理論と臨床. 誠信書房.
- 下山晴彦 (2001). 下山晴彦 (編著) 教育心理学 II. 発達と援助の心理学. 東大出版.
- Spitzer RL, Skodol AE, First MB, Gibbon M (Eds) (2002). DSM-IV-TR Casebook. A Learning Companion to the Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (4th ed. Tr). Virginia: American Psychiatric Publishing. 高橋三郎・染谷俊幸 (訳) (2003). DSM-IV-TR ケースブック 医学書院 pp499-512.
- 田辺肇 (2004). 日本語版ケンプリッジ離人尺度. 未刊行.
- 田中裕記 (2008). 青年期健常群における離人体験 程度・とらえ方と精神的健康度との関連について 九州大学教育学部卒業論文. 未刊行.
- 立山万里 (1998). 精神と行動の症候学 B. 離人症 松下正明 (編) 臨床精神医学講座 第1巻 精神症候と疾患分類・疫学 中山書店 pp196-207.
- World Health Organization (WHO) (1992). The ICD-10 Classification of Mental Disorders: Clinical descriptions and diagnostic guidelines. World Health Organization. 融道男・中根允文・小見山実・岡崎祐士・大久保善朗 (訳) (2005). ICD 10 精神および行動の障害 臨床記述と診断ガイドライン 医学書院 pp178-181.
- 安永浩 (1987). 離人症 土居健朗・笠原嘉・宮本忠雄・木村敏 (編) 異常心理学講座 4 神経症と精神病1 みすず書房 pp213-253.

青年期の感情に関する調査

この調査は、調査者の卒業論文で用いるデータを収集するためのものです。
調査する内容は、青年期の感情についてであり、結果は統計的に処理し、個人が特定されることはありません。

- 質問項目によっては答えることが負担になることがあるかもしれません。
その際は無理にその問題に答えようとせず、次の質問に進んでください。
- 気分が悪くなることなどがありましたら、回答を止め、
回答してあるところまででお渡し頂けると幸いです。

ご協力よろしく申し上げます。

なお、この質問紙に関する質問・疑問などは下記調査者までご連絡ください。

調査者

九州大学教育学部
教育心理学系心理臨床コース
カウンセリング第2研究室
田中 裕記
E-mail : ed104030@s.kyushu-u.ac.jp

この表紙は切り取られても構いません。

問1 あなたのことについてお尋ねします。以下に記入をお願いします。

() 大学 () 学部 () 年 性別 (どちらかに○をつけてください) : 女・男 年齢 : () 歳

問2 以下の項目をときどき体験すると、あなたはどのように感じますか。思い浮かんだことを、自由に記入して下さい。

例：青空をみて「きれいだ」と感じる、という体験。

すがすがしい気分。 うやしい感じ。
面倒な気がする。
つまらない。

1. 起きているのに、まるで夢の中にいるような感じがする、という体験。

2. 自分の手や足が大きくなった、あるいは、小さくなったように感じる、という体験。

3. 自分が現実世界から取り残された（切り離された）感じがする、という体験。

4. これまで親しかった人やものが、突然なんとなく疎遠に感じるようになる、という体験。

質問は以上です。

意見・感想などありましたら、お書きください。

ご協力ありがとうございました。